論文内容の要旨

論文題目　　同時代叙述史料に見る 16 世紀イスタンブルの都市イメージ

氏名　　宮下遼

本稿は，16 世紀，および一部 17 世紀の叙述史料を用いつつ，オスマン朝の文化的選良層と西欧人旅行者，そしてイスタンブルの庶民という三者におけるイスタンブルの「都市イメージ」を明らかにしつつ，イスタンブルという都市の特徴について検討することを目的とした都市文化史研究である。

16，17 世紀イスタンブルの「都市イメージ」を研究する意義は，世界の他の都市と比較したとき，当時のイスタンブルが世界的にも類例の少ない多彩な住民や文化，宗教が共存した空間であったことに求められる。すなわち，この都市を支配したオスマン朝は，異なる文化的出自を持つ人々を，納税者としての義務を履行する限りにおいて駆逐せず，結果としてイスタンブルは住民のみならず，都市景観においても古代ギリシア・ローマ，ビザンツ帝国，オスマン朝という異なる時代に属し，異なった文化，技術によって築かれた建築物が残存する稀有な都市空間を持つに至ったからである。そして征服直後の急激な人口増加を経て，その後も恒常的な人口流入が続いたたこの都市では，居住地の明確な差別化のような目に見える形での社会集団ごとの住み分けは重視されず，基本的にその居住や往来に厳しい制限が設けられていたわけではない。つまり，イスタンブルと対峙した帝国内外のさまざまな観察者たちにおける都市の空間的差異化は，居住地の差別化という実際の空間における住み分けよりも，むしろ同一対象を観察しながらもまったく異なった「都市イメージ」を抱くという精神的な領域でこそ起こっていたと考えられるのである。そのため，多種の住民と高い歴史的重層性を有する都市空間を擁するイスタンブルで発生した「都市イメージ」は，たんなる文学的研究対象を越えて，都市史研究，文化史研究にもかかわる実質を伴っていると言えるだろう。本稿ではオスマン朝の文化的選良，西欧人旅行者，

イスタンブルの庶民という三種の観察者を設定することで，こうした「都市イメージ」を多角的に検討した。

なお，本稿における「都市イメージ」の定義は人々の都市にたいする心象風景や印象が一定の共通性を保ちつつも，完全な定型性を獲得せず，散発的にテクストに書き記される段階のイメージ，すなわちクルツィウスが定義した「歴史的トポス」の前段階として位置付けられる心象であり，イスタンブルという文脈上で語られた同時代人の観察集団おのおのの言説空間内に共通して見られる建築的，人的対象についての，「ある程度の」定型性を持つイメージと定義される。

以上を踏まえた上で本稿では，序論において先行研究の確認と問題点の指摘を行い，オスマン朝の文化的選良，西欧人旅行者，イスタンブルの庶民という三種の観察者の定義と，おのおのの集団によって著された史料についての解説を，ついで第一章では，各観察者たちが共通して取り上げる 16，17 世紀イスタンブルの基本的な地勢や市内外の主な建造物の実状を概観した。その上で，第二章では古典定型詩の教養を備えた人々を中核とするオスマン朝の文化的選良の「都市イメージ」を，第三章では異邦人としてイスタンブルをおとない，前記のオスマン朝選良層とはまったく異なった視点からこの都市を観察，記録した 16 世紀半ばの西欧人旅行者の都市イメージを，そして第四章では二人の市井の名士の著作に見られる 17 世紀のイスタンブルの庶民たちの都市イメージを，それぞれ検討した。

上記の研究を経て本稿では，オスマン朝の文化的選良である古典詩人の残した都市礼賛を行う古典定型詩，同時代都市の社会問題を扱う当世批判の諸作品の分析を通して，都市のランドマーク群から成り，王朝を称揚しようとする詩的美意識に則った「理想の都市」像，及び紳士としての選良層が持ち合わせた雅人意識という価値観にそぐわない庶民が暮らす卑しい日常生活空間からなる「下郎の巷」という二種類の都市イメージがオスマン朝の文化的選良に保持され，雅と野卑の対比構造の中でイスタンブルが捉えられていたことを明らかにした。

また，16 世紀半ばにイスタンブルを訪れた西欧人旅行者ダラモン大使一行の残した東方旅行記の分析を通して，彼らが「トルコ帝国」の敵情視察という実地検分と，異文化ないし異教・キリスト教古代文化が発見されることを予定された観光名所めぐりの双方の観点からイスタンブルを観察し，精強かつ規律正しいトルコ兵や豪奢な宮殿，宮廷行事とともに西欧人にとっては野蛮と見なされた割礼のような種族や奴隷売買についての実地検分を主体としつつ，強大なトルコ帝国というイメージを託された「現代的異文化の都市」，ならびに，市内各所に残るギリシア・ローマ，ビザンツ期の遺構やトルコ人の習俗といったさまざまな要素に異教・キリスト教古代文化を見出すという「異教・キリスト教古代文化の都市」という二種類の都市イメージを併せ持ったことを詳らかにした。

さらに，オスマン朝の文化的選良でありながら庶民的視座からも都市を記述した市井の名士二名の地誌作品の検討を通じて，その叙述に露頭を覗かせる庶民の都市にまつわる多彩な俗信を検討し，人的対象や建築物という多様な要素にその都度，不可視の力への畏れを感じとるという迷信的生活意識の存在を指摘しつつ，さまざまな俗信が都市の随所に点

在する庶民層に特有の「俗信の都市」像を明らかにした。

このようにオスマン朝の文化的選良，西欧人旅行者，イスタンブルの庶民は，おのおのの大きく様相を異にする都市イメージが見られる。つまり、イスタンブルの「都市イメージ」群の最大の特徴は，おのおののイメージが交わることなく，併存してテクストに書き残されるという相関関係の希薄さであると言えよう。まずもって同時代人の言説空間における 16，17 世紀イスタンブルは，言語や宗教，文化とそこから派生する生活基調を異にする観察者たちが創出した独自の都市イメージ群が，交わることなく併存するという多元的構造を有しているのである。本稿ではこうしたイスタンブルの状況を「多元的都市イメージの場」と呼ぶこととした。

この「多元的都市イメージの場」としてのイスタンブルの構造的起源はオスマン朝の支配体制に求めるのが妥当である。オスマン朝は都市建設に際しては異教の建築物をことさらに排除せず，モスクへの転用やワクフ寄進の形で既存の建築物を再利用することが多かったため，結果として帝都の都市景観の中には観察者にたいしてその文化的背景に応じた興味関心に応じた選択性を保証しうる建築学的歴史性，多様性が胚胎されるに至っていたからである。また，ズィンミー制度を施行したオスマン朝は，非ムスリムの信仰や文化といった精神的領野にまで積極的に立ち入ろうとしなかったため，この緩やかなオスマン朝支配体制が，多様な観察者が比較的自由な視点から都市を観察し，そこに生じたイメージをテクストに書き残すことを許した点も，都市イメージの多様性に少なからぬ影響を及ぼしている。「多元的都市イメージ」の場としてのイスタンブルは，オスマン朝の支配体制に発する建築的，社会的要因によって現出した観察者，被観察対象双方における多様性によって保持された空間だったのである。

一方で，「多元的都市イメージ」の中で三種の観察主体の都市イメージに共通して見られる要素に着目した場合，そこには同時代の観察者による歴史的重層性の認知という現象が顕著に見られる。無論，ローマ帝国とその文化的影響を残した後継国家群が長らく存在した地中海世界にあっては，主に古代建造物という形でギリシア・ローマ文化が都市空間の中に取り残されることは少なくなかった。従って建築学的見地から見れば歴史的重層性を胚胎する都市はイスタンブルだけではない。しかし，イスタンブルには，征服後百年を経てなお，学究や知識人のみならず，ムスリム，非ムスリム，詩人，庶民，異邦人という身分や言語，宗教を問わない広範な同時代人によって歴史的重層性が感知されるアヤソフィア・モスクやアトメイダヌのような特異点が複数残存し，同時代的な影響力を行使している。これはイスタンブルの歴史的重層性が地中海他都市を圧する強い影響力を保持していたことを示すだろう。

以上のように本稿では従来のトルコ史，トルコ文学(史)研究ではほとんど行われてこなかった都市イメージ研究を行い，イスタンブルという都市が，そこに生きる者が意識，無意識にかかわらず常に都市の歴史性を感知し，また感知せざるを得ない際立った歴史的重層性を持つ都市であったという結論を得るに至った。